6）江戸時代における「かな」の発音
－歯と口腔の関係表示と五行－

○中沢　紀子，齋藤　高弘，高橋　和裕，天野　義和
（奥羽大・歯・教養教育）

（目　的）　現在，私たちは文字を見ただけで，発音することができる。日本語の発音は，学校で教わることなく，親から子へと伝えられているし，文字と音の対応については，学校の読み書きで習得している。では，江戸時代はどのように文字を習得したのであろうか，また現代と同じように発音していたのであろうか。そこで①・②の問題を設定し，この２つの問題について，現在の言語学で指摘されている見解及び実例を紹介した。

①「江戸時代の文字習得方法」

②「江戸時代の発音と発音表記方法」

（調査資料及び方法）　調査資料として，往来物3資料『女庭訓往来』と『永代節用無尽蔵』，『實語童子教』を使用した。

調査方法は，江戸時代の読み書き・発音が示されている部分を翻刻し，従来の指摘と一致するか検討した。

（調査結果）

①「江戸時代の文字習得方法」

五十音図の他に，「いろは」を用いて仮名習得をしたことが資料から窺える。平仮名・片仮名に関する伝説が調査資料に記されているなど，文字に対する興味は高かったようである。

②「江戸時代の発音と発音表記方法」

『永代節用無尽蔵』の中の五音相通には，ア行～ワ行までの五十音図があり，上段にはア行からそれぞれ「喉，牙，歯，舌，唇」と記述されている。この「喉や牙」というものは，中国から伝わった発音表記方法（喉音・牙音・歯音・舌音・唇音）であり，中国の漢字の音を研究する手段として使われていたものである。つまり，江戸時代は中国から伝わった発音表記方法を用いて日本語の発音を表していたということがわかる。

また，上記の発音表記方法からハ行の発音に着目した。『永代節用無尽蔵』では，ハ行は唇音となっている。この言語資料が反映された時代のハ行の音は，従来の先行研究の指摘通り，唇を用いた唇音（つまり現代日本語の両唇摩擦音）ファ・フィ・フ・フェ・フォという音であったことが裏付けられた。

（結　論）　江戸時代における文字・発音に関する言語学の見解とその実例を紹介した。2つの問題設定から，以下の３点を明らかにした。

1）文字習得：いろは

2）発音表記方法：中国の発音表記方法を使用。

3）ハ行の発音：現在の発音とは異なり，ファ・フィ・フ・フェ・フォという音であった。

7）重症歯性感染症にて入院中に上部消化管出血により急変した１例

○近藤　祐，宮島　久，吉開　義弘，岡崎　敦子
竹内　聡史，御代田　駿，三科裕美子，太田　嘉弘
（会津中央病院歯科口腔外科）

（緒　言）　消化管潰瘍は消炎鎮痛剤の長期服用で発症することは良く知られている。場合によっては消化管出血により，高度の貧血に陥ることもある。しかし，疼痛などの訴えが乏しいことも多く，吐血などの症状が無い場合は診断しづらい。今回演者らは，重症歯性感染症で入院中に，意識障害を起こし，脳梗塞を初期に疑ったが，精査の結果，上部消化管出血による意識障害であった１例を経験したので，その概要を報告した。

（症　例）　71歳，男性。

主訴：左側下顎臼歯部の疼痛。

現病歴：初診の数日前より急性症状を認め，紹介元で加療を受けるも，改善無いため当科紹介。

基礎疾患：脳梗塞，高血圧症，前立腺肥大，変形性膝関節症。治療薬として，多種類の薬剤が処方されており，その中に複数種類の消炎鎮痛剤が含まれていた。

現症：発熱および全身倦怠感を認めた。左側頬部は腫脹しており，開口障害も認めたが，波動は触知しなかった。画像所見にて，左側下顎埋伏智歯を認め，周囲骨は瀰漫性に吸収していた。血液検査所見にて，急性炎症および貧血を認めた。

臨床診断：左側下顎智歯周囲炎から継発した顎炎。

処置および経過：即日入院の上，抗菌療法および消炎処置施行。夜間帯に意識レベル低下。脳神経外科にて精査するも異常なし。救命センター転科。精査の結果，上部消化管出血と判明。消化器科転科の上，上部消化管内視鏡視下に止血処置。消化器症状の消失および消炎が図られたため，原